演題：「いちばんじゃなくて、いいんだね～生まれてきてくれて、ありがとう」
（平成 27 年 5 月 15 日　松野　明美　先生）

松野先生といえば、陸上競技選手であり、テレビでもよくお見かけする有名な方という印象があった。今回、はじめて講演の場で拝見し、その屈託のない明るい笑顔がすごく素敵だと感じられた。松野先生は子どものころは無口な、大人しい、友達が一人もいないいじめられっ子だったそうだ。足は小学校で 1 番遅かったと本人はおっしゃるが、オリンピックにまで出場していた方でもあり、にわかには信じられなかった。

走るのも止めるのも自分次第という過酷なマラソンを始めたのは、小学校４年生のとき。小学校５年生のときには地元の町内マラソン大会に思いもよらず小学校代表として選出され、そこで生まれてはじめて１番をとった喜びを感じ、応援してくれた父母の嬉しそうな笑顔が印象に残った。１番をとれば、こんなに嬉しそうな顔をしてくれる、もっと頑張って練習をして、もっと父母を喜ばせたいと感じた。無口で、大人しい、友達が一人もいなかった子が、１番をとったことで自信がわき、性格も明るくなった。何がきっかけとなるかわからない。家族の笑顔が子供の自信をひきだし、勇気を与え周りの環境を変えるということ、それは身をもって実感した。

社会人となってマラソンにのめりこみ、他人に勝つために様々な努力を重ねた。早朝練習の前に個人的に練習をする、出勤時も走る、24 時間一日中マラソンのことを考えた。勝つためには人の４倍は努力しなければならない。言葉では簡単だが、なかなか出来ることではない。そういった努力が実り、20 歳のころにフルマラソン代表ではなかったが女子 10000 メートル走の代表として 1988 年のソウルオリンピックの日本代表に選出された。結果９位でゴールした。ただ、拍手をいただく度に思っていたことは１番をとってこそ拍手がもらえる、２番ではだめ、１番だからこそ幸せな人生が歩めると本当に思っていた。

二人目の子供を授かった。出産し 2,500 グラムほどの小さな子はダウン症だった。当時、障害について何も知らなかった。自分の明るいイメージが崩れ仕事が減る、子供のことより自分のことが大切、子供を隠して一生いきていこうということを考えていた。どうして私を選んで産まれたのか、そんな気持ちで一杯だった。反対に、夫は出来るだけ外に子供を連れていこうとしていた。そんな夫に感謝している。
今となれば、周囲の協力に感謝している。隠そうとしていた自分が恥ずかしい。あきらめるより希望を持って過ごす方がよい。私達自身も親として人生を楽しんでいきたい。１番でなくても子供と一緒に生活できる幸せ、ちょっとした成長が嬉しいと実感している。親が元気で明るくいることが大切であることを実感している。

松野先生が最後に「私がこの子を選んだんだなあ」とおっしゃられたことが非常に印象に残った。お互い頑張らなくても、１番ではなくても笑顔で生きていくことの大切さ、親が親として何ができるのか、あらためて考えさせられるお話であった。